教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する検討
―エデュテイメント大学活動を通して（2）―

眞榮城　和　美
石　沢　順　子
土　橋　久美子
や　た　み　ほ
大　貫　麻　美
浅　岡　靖　央
目　良　秋　子
宮　下　孝　広

問題と目的

近年、大学と地域との連携活動は活発さを増しており、大学所在地の地域や大学間相互のつながりを持った組織が大学地域連携活動を支援する取り組みも増えてきている（例：大学コンソーシアム石川，2017）。また、各大学が地域連携センターを持ち、大学内でのコンペなどを経て、大学での学びを地域に活かす取り組みを推進している事例も増加傾向にある（例：関西大学，2018）。産学連携による活動においても、企業の社会的責任：CSR（corporate social responsibility）に基づく取り組みや、企業が持続的成長を目指す上で重視すべき３つの側面（環境E：environment、社会S：Social、企業統治：Governance）を考慮したESG活動と大学との連携などが行われている（例：宮下・大貫・佐野、2017，アサヒ飲料，2018）。さ

らに、地域連携型アクティブラーニング（岡崎・清原・日高，2015）の有効性に関する検証も進展し続けている。

本学においては、2017年度より学内の教育プログラム推進助成を受けて、人間総合学部エデュテイメント[注1)]大学がスタートした。初年度の活動については、「教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する試み(1)」（眞榮城・浅岡・目良，2017）として報告し、初回の実施状況について振り返るとともに、エデュテイメント大学の継続展開を目指す上での課題について明らかにした。大学（教育プログラム）と地域との連携活動を発展的に継続していくためには、やはり大学内に地域連携の拠点となる部署があること、またその部署に所属する教職員と学内全体との連携が不可欠であるものと考えられる。さらに、企画したプログラムと授業との連動、学生の主体的活動を推進する仕組みの構築が必要だと考えられる。しかしながら、本取り組みを通した学生への教育効果に関する実証的なデータや、本取り組みを継続展開していくための仕組み作りに求められる基礎的資料は未だ不足している状況にある。そこで本研究では、本学人間総合学部エデュテイメント大学2017から2018前半の取り組みを通した「学生の学びの姿」を振り返るとともに、地域に根ざした大学の在り方を視野に入れた大学・地域連携活動の発展方法について改めて検討することを目的とした。

方法

プログラム開催までの流れ：2017年度実施内容については、2016年度内に全プログラムの概要について確定（Table 1、Table 2参照）し、2017年５月より本格的な準備を開始した（事務作業担当者を１名配置）。2018年度プログラムは2017年度の実績を踏まえ、また学生の主体的参加可能性や外部機関との連携について検討した上で新規プログラムを１つ加え、継続プログラムについては実施時期を精査した。広報戦略としては（眞榮城・

浅岡・目良，2017）と同様、チラシの作成を６月中に完了し、７月から配布した（調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課を介して調布市を中心に配布）。2017年度、2018年度ともに調布市の協賛を得ることが可能となり、開催時には協賛であることを明記した。各プログラム担当教員が授業内で学生とともにプログラム準備に取りかかった。

2017年度プログラム実施対象者および実施時期：2017年度の実施時期は2017年８月～2018年２月、2018年度の実施時期は2018年８月であった。各プログラムの参加者および参加学生はTable 1・2に示したとおりであった。

Table 1　白百合女子大学人間総合学部エデュテイメント大学2017内容

開催日時	タイトル	対象	担当学科・担当者
８月５日㈯	紙芝居の魅力 見る・聞く・演じる、楽しさ体験	幼児～小学校６年生と保護者 10組	児童文化学科 浅岡靖央 学生　８名
	表現ワークショップ 人前で話せるようになるヒント教えます	小学校３～６年生と保護者 ６組	発達心理学科 眞榮城和美 学生　９名
10月28日㈯	からだであそぼう！ 親子で楽しむ運動遊び	４歳(年中) 児・５歳(年長) 児と保護者 15組	初等教育学科 石沢順子 学生　５名
	しぜんとあそぼう！ 親子でキュッキュ、バードコール作り	４歳(年中) 児・５歳(年長) 児と保護者 20組	初等教育学科 土橋久美子 学生　５名
10月28日㈯ 29日㈰	くるくるアニメおもちゃを作ろう！	５歳～小学校６年生(未就学時は保護者同伴) 30組	児童文化学科 やたみほ 学生　５名
11月23日㈭祝	今日はとことんリラックス	幼児から小学校６年生と保護者 20組	発達心理学科 眞榮城和美 学生　15名
２月10日㈯	「カルピス」こども乳酸菌研究所 （白百合女子大学版）	小学校４～６年生と保護者　30組	初等教育学科 大貫麻美・ 宮下孝広 学生　15名 アサヒ飲料株式会社 社員

Table 2　白百合女子大学人間総合学部エデュテイメント大学2018内容

開催日時	タイトル	対象	担当学科・担当者
8月4日㈯	紙芝居を楽しもう！ 見たり・聞いたり・演じたり	幼児～小学校6年生と保護者 11組	児童文化学科 浅岡靖央 学生　10名
10月13日㈯	「カルピス」こども乳酸菌研究所 （白百合女子大学版）	小学校4～6年生と保護者 30組（予定）	初等教育学科 大貫麻美・ 宮下孝広 学生　10名 アサヒ飲料株式会社 社員
10月27日㈯ 28日㈰	くるくるアニメおもちゃを作ろう！	5歳～小学校6年生(未就学時は保護者同伴) 30組（予定）	児童文化学科 やたみほ 学生数名
11月23日㈮祝	今日はとことんリラックス	幼児から小学校6年生と保護者 20組（予定）	発達心理学科 眞榮城和美 学生　15名
12月22日㈯	クリスマスを歌おう！	小学校1年生～6年生と保護者	発達心理学科 春日文 学生数名
1月12日㈯	からだであそぼう！ 親子で楽しむ運動遊び	4歳（年中）児～小学校2年生と保護者 20組（予定）	初等教育学科 石沢順子・ 目良秋子 学生　10名

調査内容：参加学生には実施前と実施後に地域連携活動に関する意識調査を行った。調査項目は、ボランティア活動継続動機測定尺度（妹尾、高木, 2003）を使用した。なお、今回の活動はボランティア活動という表現よりも地域連携活動という表現を用いることが相応しいと考えられたため、教示部分と2つの質問項目で用いられている「ボランティア」という表記を「地域連携活動」に置き換えて用いた。本尺度は自己志向的動機（自分の持っている知識、技術をつかう練習になる、自己を再発見し、成長させることができる、余暇が有効に使える等からなる5項目）、他者志向的動機（人に喜んでもらえる、人や社会の役に立てる、人はお互い助け合わねばなら

ず、自分にもその義務がある等からなる６項目)、活動志向的動機（活動を通じて積極的に社会参加できる、喜んだり楽しんだりできる、友人を得ることができる等からなる５項目）の計16項目から構成されており、回答方法は、非常にあてはまる：５～まったくあてはまらない：１までの５件法であった。また、実施前には「本活動に期待していること」、実施後には「本活動の感想と今後の活動に期待していること」について自由記述を求める回答欄も設定した。

各プログラム主担当教員６名を対象として、プログラム実施を通して感じた学内連携意識について自由記述による回答を求めた。設問内容は以下の通りであった。１.「学生の学び」の姿に関する効果（良かった点）と課題。２.「地域連携」のあり方に関する効果。３.「学内連携」の在り方に関する気づきと課題。４．その他（今後の本活動への期待など)。

結果

１．各プログラムの実践報告

まず、2017年10月期～ 2018年８月期までに実施した人間総合学部エデュテイメント大学について実施順にまとめた。2018年度８月期実施内容は１件であり、実施時期も前回と同様であったことから、結果としてまとめる上で、初回実施内容と継続実施内容に分けて報告することとした。

[初回実施内容（2017年度実施)]

① からだであそぼう！

活動内容:新聞とパラバルーンを中心に親子で楽しめる運動遊び。新聞遊びは学生が進行を担当し、緊張しながらも新聞島じゃんけんや輪くぐり、しっぽとりなどを紹介した。ボールプールやマットなど自由に遊べるアスレチックコーナーも設置した。

参加者の様子：最後まで子どもたちが元気いっぱいに走り回る姿

が見られた。親子間はもちろん、他の家族とコミュニケーションをとる場面もあり、たくさんの笑い声が響いていた。パラバルーンではみんなで息を合わせて動かすといろいろな形になったり、風船を飛ばせたりして大きな歓声があがる場面もみられた。保護者からは「子どもたちがとても楽しそうだった」「新聞や風船の遊び方の幅が広がったので、自宅でも実践してみたい」という感想が聞かれた。

学生たちの様子：参加者の楽しそうな姿や保護者からのフィードバックを受けて、学生たちも自信を付けている様子がみられた。

Figure 1　からだであそぼう活動風景

② しぜんとあそぼう！

活動内容：野鳥と会話ができるバードコールを作成。木片に丸カンという金具をつけ、毛糸で巻いたり、木にヤスリをかけたり、色を塗ったりと、オリジナルのバードコールを作成した。

参加者の様子：出来上がると、早速“キュッキュ”と鳴らしていた子どもたち。子どもたちだけでなく、保護者も夢中になって一緒に作成している姿が見られた。途中小雨が降る中、出来上がったバードコールを首にかけ、白百合の森にも出発。ヒマラヤ杉の下で雨宿りをしたり、どんぐりの道で沢山のどんぐりを拾ったり、短い時間だったが、満足そうな子どもたちの様子も見られた。

学生たちの様子：参加した子どもたちに対して、学生が「ほら、鳴ったよ！鳥さんとお話しできるかな～」と、話しかけるなど、学生と

参加者との交流も活発に行われていた。

Figure 2　しぜんとあそぼう活動風景

③　くるくるアニメおもちゃを作ろう！

活動内容：回転式のぱらぱらマンガ装置「キノーラ」作りは、6枚の動く絵を描くことから始まる。三種類の塗り絵を用意し、絵を足したり色を塗ったりして作ることができる。

参加者の様子：一から描くことにチャレンジする子どもが多くみられた。両日ともに底冷えのする雨の日だったが、研究室の中は、絵を描く親子の熱気に包まれていた。

学生たちの様子：「アニメーション制作」を受講している児童文化学科の学生が参加者の活動をサポートし、子どもたちに作り方のアドバイスをしたりどんな絵を描こうか？と一緒に考えたりする姿が見られた。

Figure 3　くるくるアニメおもちゃを作ろう！活動風景

④　今日はとことんリラックス

活動内容：親グループと子どもグループに分かれて白百合の森を

散策（プチ森林セラピー体験）、クロモジという植物の枝を使ったサッシェ（香袋）作り、ミックスジュース製作＆中身当てクイズに親子で取り組める内容を用意した。子どもグループはiPadを活用したスタンプラリー体験も用意されていた。ゲストに長野県上水内郡信濃町在住の間瀬理江さん（森林メディカルトレーナー）をお迎えし、森林セラピーや呼吸法のリラクゼーション効果について説明を受けた。

参加者の様子：「家族でそろって参加ができて、皆がそれぞれリラックスすることができました。」「本日はとてもリフレッシュできました。子ども連れで山に行ってきたいと思います。」「自然の声が聞けてよかったです。これからも森で実践してみようと思います。」といった声が聞かれた。

学生たちの様子：学生たちがリーダーとなり、子どもグループと親グループに分かれて散策したため、学生たちも自分たちの進行や声かけにより参加者の反応が変わることへの気づきが生まれたようであった。

Figure 4　今日はとことんリラックス　活動風景

⑤「カルピス」こども乳酸菌研究所（白百合女子大学版）

活動内容：アサヒ飲料株式会社の社員の方が全体的な進行や説明を担当し、初等教育学科の学生が少人数班ごとに博士（ファシリテーター役）として入り、班の活動支援を担当した。「カルピス」誕生物語を視聴し、「カルピス」について知った後、班に分かれて活動

した。「カルピス」の原料である牛乳と、「カルピス」の性質の違いを、香りや味で確認した。（なお、2018年度の実施時には、「カルピス」製造過程の一時発酵乳も使用して比較を行うこととした。）参加者が作った「カルピス」のプレパラートと牛乳のプレパラートを顕微鏡で観察。牛乳にはなかった乳酸菌や酵母を「カルピス」の中に見ることが出来た。すべての活動が終了した参加者には、「カルピス」こども乳酸菌はかせの任命状や個人番号入りバッジが授与された。

参加者の様子：乳酸菌にはいろいろな種類があることや、それらの種類により働きに違いがあることを学ぶことができていた。参加者は「自分なら、どんな乳酸菌を発見したいか」を考えてカードに記したものを見て、参加者同士がお互いの考えを聞きあっていた。

学生たちの様子：参加者たちを支援しながら、個々の学びに寄り添った声かけをしていた。ときには、参加者が示す思いがけない発想や頼もしい考えに驚いたり、拍手したりする様子もみられた。

Figure 5 「カルピス」こども乳酸菌研究所　活動風景

［継続実施内容（2018年度8月期実施）］

紙芝居を楽しもう！

活動内容：前期授業「児童文化・紙芝居」を受講した学生による紙芝居の実演と、教員による「紙芝居を演じるコツ」（配布資料あり）の説明及び実演とで場の雰囲気を作った後、参加家族ごとに分かれ、そこに学生たちも加わり、互いに演じたり演じられたりして、紙芝

居の世界をたっぷり楽しんだ。紙芝居作品については、授業の中で学生たちが選択した作品と教員が選択した作品とを合わせて用意し、紙芝居舞台も各家族に１台ずつ準備した。

参加者の様子：昨年に続いて、子どもたち自信が積極的に紙芝居を演じる姿が多く見られ、保護者がそれをほほえましく受けとめている様子がうかがえた。子どもたちにとっても保護者の方たちにとっても、ふだんはあまり味わえない、紙芝居を演じることの楽しさを実感できた時間になったと思われる。

学生たちの様子：初めて関わり合う親子に対して、最初のうちは少し戸惑いながらも、紙芝居を楽しむ過程を通して次第にうちとけていき、いっしょに紙芝居を楽しんでいる姿があちこちで見られた。あっという間に時が流れていく中で、紙芝居の力について、子どもたちについて、さらに親子関係についてなど、さまざまな気づきが生まれたようである。

Figure 6　紙芝居を楽しもう！活動風景

2. 参加学生全体の地域連携意識について

参加学生を対象として、各プログラム実施前後に「地域連携活動意識」について回答を求めた。調査の対象となった学生は事前事後両方に回答した35名（平均年齢20.39歳、$SD = 1.15$）であった。自己連携活動意識の３因子（「自己志向的動機」、「他者志向的動機」、「活動志向的動機」）についてプログラム実践前後での平均値の差の検定（対応のあるt検定）を行った。その結果、自己志向的動機および活動志向的動機の２因子において活

動後の得点が活動前よりも有意に高いことが示された（自己志向的動機t（34）=2.74, p<.01；活動志向的動機t（34）=1.98,p<.05）。各因子の平均値はTable 3に示した通りである。

Table 3　参加学生の地域連携意識（プログラム実施前後）対応のあるt検定

	実施前	実施後	t値（df）	p
自己志向的動機	3.90（.53）	4.15（.49）	2.74（34）	.01
他者志向的動機	3.81（.54）	3.90（.54）	0.88（34）	.39
活動志向的動機	3.80（.55）	3.96（.64）	1.98（34）	.05

3. プログラム実施教員のエデュテイメント大学に関する意識

プログラム実施教員を対象とした自由記述によるアンケート調査を行い、「学生の学びの姿勢」「地域連携のあり方」「学内連携のあり方」「今後への期待」の４点について、効果（良かった点）と課題（難しかった点）に分類した。分類に際してはKJ法を用い、分類作業時にはIdeaFragment2を使用した。各設問について、KJ法の分類手順に従って自由記述から得られた回答を類似した内容ごとにカテゴリー分類した。

「学生の学びの姿勢」に関する効果は、活動準備時に関する効果と当日の実践を通して得られた効果、活動を終えてからも持続すると考えられる効果についての記述が認められたため、「活動準備効果−学習機会の拡大−」、「当日実践効果−主体性の深化−」、「活動事後効果−視野の拡張−」の３カテゴリーを設定した（Figure 7参照）。「地域連携のあり方」「学内連携のあり方」「今後への期待」の設問に記載された内容は今後の課題に相当するものが多く認められたことから、「エデュテイメント大学・継続実践に関する課題」の中で「地域連携」「学内連携」のカテゴリーを設定して分類した（Figure 8参照）。

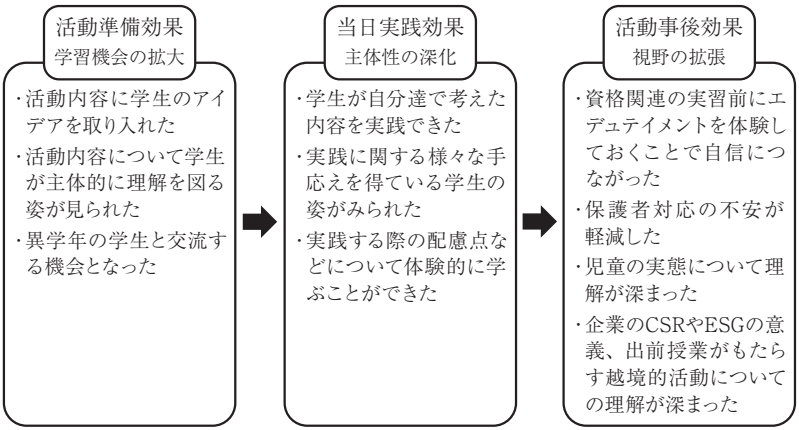

Figure 7　エデュテイメント大学の実践を通した学生の学びの姿に関する効果

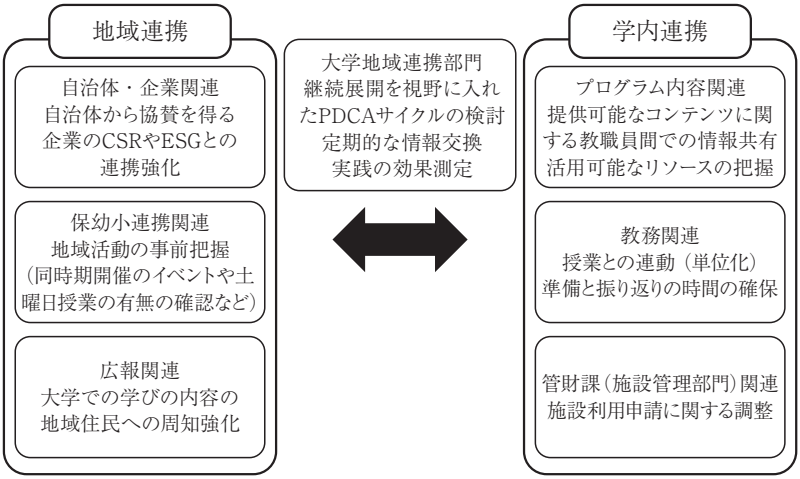

Figure 8　エデュテイメント大学・継続実践に関する課題

考察

学生の学びを促す教育プログラムの在り方

人間総合学部エデュテイメント大学に参加した学生を対象とした各プロ

グラム実施前後の地域連携活動意識調査から、学生たちの自己志向的動機（自分の持っている知識、技術をつかう練習になる、自己を再発見し、成長させることができる）と、活動志向的動機（活動を通じて積極的に社会参加ができる、喜んだり楽しんだりできる）が高くなっていたことが示された。この結果から、本活動を通して、学生たち自身の学びの深化が生じていたのではないかと考えられる。また、各プログラムのマネジメントを担当した教員の自由記述を分類した結果から、エデュテイメント大学に参加した学生の学びの姿として、活動準備効果として「学習機会の拡大」・当日実践効果として「主体性の深化」・活動事後効果として「視野の拡張」が報告されていたことから、地域と大学が連携する学習形態（地域連携型アクティブラーニング）の有効性が示唆されたものと考えられる。

大学・地域連携活動の発展方法

本活動を通して、改めて地域と学内の連携を活性化する大学内の中核組織は欠かせないものであることが確認された。今回は、教育プログラム推進助成を受けていたことにより事務担当職員を雇用することが可能となったが、例えば、全プログラムの参加受付、参加者のイベント保険登録などの細やかな部分についての知識と技術に関する情報を大学内に蓄積し、他の活動にも応用可能な体制を整えておくことが不可欠であると考えられる。また、エデュテイメント大学のような地域連携型アクティブラーニングを継続発展させていたくためには、これまでのさまざまな学内的取り組みを俯瞰し、有機的に展開することが可能な組織作りが求められよう。学生が主体的に活動を企画し、推進することを促す組織作りとして、予算的裏付けを持って学生の活動を奨励する（関西大学，2017）などの学内的な工夫が必要なのではないかと考えられる。さらに、コンソーシアムを活用している例（コンソーシアム石川，2017）などを参考に、大学間の連携強

化することは、学生の学びの機会を拡大することにつながり、学生の主体的学びを促進することが可能となるのではないだろうか。

今後の課題

現在、本学で取り組んでいる「人間総合学部エデュテイメント大学」は、学生の学びの機会としても、また、地域社会にとっても有効な学びの場であると捉えることができる。

大学機関には、活動の記録を保存・蓄積し、未来に活かすアーカイブとしての機能があり、久世・横山・谷・井上（2015）は、「大学が大学としてのアイデンティティを確立するためにも、『知』の拠点としての大学アーカイブを構築することが求められている」と指摘している。大学が地域に必要とされる知の拠点であり続けるためにも、今後はさらに、地域のニーズを把握しながら、学内にあるリソースを活かす有機的な取り組みを目指していく必要があるだろう。

脚注

注１）エデュテイメントとは、教育を意味するエデュケーション（education）と、娯楽を意味するエンターテインメント（entertainment）を合わせた造語である。

引用文献

アサヒ飲料株式会社，2018　ESGの取り組み強化＜食育＞～これまで授業をお届けしてきた児童数が１万人を突破～“乳酸菌と発酵のひみつ”を伝える出前授業「『カルピス』こども乳酸菌研究所」を実施～「青少年の体験活動推進企業表彰」（主催：文部科学省）審査委員会奨励賞受賞プログラム～
https://www.asahiinryo.co.jp/company/newsrelease/2018/pick_0518.html

大学コンソーシアム石川，2017　大学・地域連携アクティブフォーラム
https://www.ucon-i.jp/newsite/2018/01/post-132.html

IdeaFragment2　2018，思考支援ツール
http://nekomimi.la.coocan. jp/freesoft/ideafrg2.htm

関西大学地域連携センター，2018　関西大学地域連携センター（地域で活動する若い力）奨励賞　応募要項
https://www.kansai-u.ac.jp/renkei/chiikirenkei/data/2018/ouboyoukou.pdf

久世均・横山隆光・谷里佐・井上透，2015知の拠点としての大学デジタルアーカイブの構成について～ 大学デジタルアーカイブの機能と構成 ～　デジタルアーカイブ研究所年報，75-80.

眞榮城和美・浅岡靖央・目良秋子，2017　教育プログラム推進と地域連携活動の在り方に関する検討－エデュテイメント大学活動を通して（1）－白百合女子大学研究紀要第53号，93-112.

宮下孝広・大貫麻美・佐野公美，2017出前授業の越境的活動としての意義：「『カルピス』こども乳酸菌研究所プロジェクト」(白百合女子大学版)を事例として，生涯発達研究教育センター紀要 (9)，109-114.

岡崎宏樹・清原桂子・日高謙一　2015　地域連携型アクティブラーニングの研究(1)-《神河プロジェクト2015》を事例として，現代社会研究，第2号，98-127.

謝辞

まずは、イベントに参加してくださいました地域のみなさまに改めて心より御礼申し上げます。今後も人間総合学部エデュテイメント大学を継続していく予定です。これからも是非ご参加ください。また今年度も、調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課の武田悠児氏には、広報活動・当日取材・HP記事作成と多岐に渡ってご活躍いただきました。チラシ作成をご担当くださった本学非常勤講師の柳田寛之氏、プログラムのノベルティグッズデザイン担当の鳥羽澄子氏にも２年連続でお世話になりました。プログラム実施に際しましては、外部専門家の方との連携により実現可能となったものがあります。「今日はとことんリラックス」では、長野県の信濃町より森林メディカルトレーナーの間瀬理江氏にご協力いただくことが叶いました。iPadを利用した白百合の森スタンプラリーでは、本学教員の今井福司氏、ブレインテック㈱の佐藤和紀氏に大変お世話になりました。また、「『カルピス』こども乳酸菌研究所（白百合女子大学版）」は、アサヒ飲料の佐野公美氏のご尽力により、ご参加くださった方たちの満足度も非常に高くなったかと思います。本当にありがとうございました。

最後になりますが、多くの学内関係者の皆様から、本プログラム実施に対して力強いエールとさまざまなアイデアを頂戴しましたことに対しまして、今年度も感謝申し上げるとともに、助成金による学内の支援が終了した後にも、さらなる学内連携・協働力向上を目指したく、お願い申し上げる次第です。